

聖々丘

第27号
2006・6・11発行
金光教教学研究所

「いかに」と「なぜ」

所長 竹部弘

当たり前のことを、子供はしばしば「どうして」と尋ねてくる。説明するのが煩わしい場合もあるが、時として「どうして太陽は燃えているの?」「どうして宇宙は始まったの?」と聞かれると、容易に説明できないことも相俟って、心の中で襟を正さしめられるのを感じる。

そうした質問は、宇宙やいのちの始まりへの関心に発しているだろう。しかし、ただ始まりの事情を尋ねているのだろうか。山本定次郎師が教祖広前へ初参拝した時、願いを述べる前に教祖から、「人間は、どうして生まれ、どうして生きていくか」ということを知らねばなりません」と語りかけられたという。子供たちはそこまで考えていないかもしれないが、そのような問いを発することで、自分が存在することの不思議さへと通じる道に触れてしまっているのである。「どうして」という問いの深みを思う。

教祖と神との間でも、「どうして」という問いが発せられた。「覚書」の「どうして」ということができたじやろうかと思ひ、氏が助かり、神が助か

ることになり、思うて神仏悲しゅうなりたの」が、それである。この前後の「覚書」の記述には、大患の事蹟の事実経過や神との応答が書かれており、その限りでは「こういうことができた」に至るまでの道筋が辿られている。しかし、先の感慨には、「どうして」ということができたかということには、それ以上のものがあるという思いが表されているだろう。

大患の事蹟を辿ることもそうであるし、先に述べた太陽や宇宙の始まりが説明されたとして、それはそのことが「どのよう」に起こったか・始まったのか」という、「いかに」の問いに答えるものである。それも「どうして」に答えるものには違いないが、それに対して、そもそも何かが始まり、今もそうであるのは「なぜ」なのかという問いがある。いかにして始まったのかという起源への問いは、今も変わることなくそうであるのはなぜかという根源への問いへと、人を導くだろう。教祖と神との間で生まれた「どうして」が、大患の事蹟を辿りつつ、その出会いの時を振り返る中で、信心の妙理として喚起されたように。しかし、「いかに」に比べて、「なぜ」という問いには、どこまでも答え難いものがある。教祖と神との「どうして」が、圧倒的な事実を前にした感嘆を伴いつつ、いよいよのところ答え難いものであったように。

今日、われわれは、様々な問題に関して、「なぜ」が問われねばならないところで、往々にして、「いかに」の問いに答えることに終始しがちなのではないだろうか。それも、「なぜ」に答え難いからと

いうよりも、「いかに」のレベルでしか問題を捉えていないということもあるだろう。

たとえ答え難くとも、「なぜ」という問いへの思索を志向していきたい。そして、しかし、また、「いかに」という問いと答えを積み重ねていくことで、着実に進んでいくことを疎かにせずに。それが、教祖の信心姿勢・信心そのものに、教学の源が見出されてきた由縁を大切に歩むことであろう。また、教学の問いに沈潜しつつ、信心の創造的な展開を求めることになるだろう。

(兵庫・姫路西教会)



客殿裏山からの眺め

研究と業務

— 今年の計画案から —

＜今年度の取り組みについて＞

現在、研究所では、教祖像、教団像等、信仰をめぐる事柄の歴史の実態や契機から捉え直すという取り組みを進めています。とはいっても、それは教義や制度・組織用語として定着している観点で再び取り上げようとするのではなく、むしろ、信仰者の誰しもが日常的に触れ合い、時に曖昧なまま、しかし信仰感覚として豊かな世界を湛えている事柄を取り上げ、その現れ方の追究を目指すものだと思います。

例えば、「助かり」、「広前」、「参拝」、「教団」、「布教」といった言葉があります。これらは現在、教団一般に流通していますし、本教信仰を理解し、説明することに関わっても欠くことの出来ない言葉になっています。しかしながら、馴染み深いゆえに、それらがどのような信仰実感を伴って成り立ってきたのか、あるいは何が「広前」と呼ばれるようになったのか、について十分解き明かされてはいないと思われまします。いま、研究所では、そうした言葉をはじめ、様々な信仰事象について、それが生み出された歴史の実態を明らかにしつつ、改めて、教祖観や教団観をはじめ、今日の信仰理解のあり方を捉え直していこうと考えています。日常に息づく信仰世界を見つめていくことから、いまを生きる者にとっての本教信仰の意義や意味を明らかにしていきたいと考えています。

このような願いに立って、今年度は、次の二つの課題を中心に取り組みを進めていきます。

① 金光大神の生活実態と関わらせた救済世界の究明

② 信仰者個々の体験を視角とした教祖観、教団観の見直し

①では、「お知らせ」の記述が人間の現実はどう関わっているのか、また、人間の現実(金光大神の人生)を関わらせている「お知らせ」の意味とは何かを明らかにしていきます。このことを通じて、金光大神という一人の人間に生じた信仰的契機を、人間全体の問題として捉え直していきたいと考えます。②では、信仰者個々の目線に降りたつて、教祖や教団を直視する「働き」を捉えていきます。具体的には、人々が生活の中にあつて何を信仰と捉えていたのか、その契機になったものは何か、また、そこに教祖像、教団像が如何に関わっているかを明らかにしていきます。

また、これからの研究領域の拡大、課題意識の深化に向けた具体的取り組みに併せて、以下の事柄を企画しています。

○ 教学研究の取り組みを紹介しつつ、全教の問題関心と触れ合うことを意図して一昨年から「教学講演会」を開催してきています。これに加えて本年からは、新たに「教学に関する交流集会」を各教区で開催していきます(本年は、九月に、東近畿教務センターを会場に開催します)。

○ 日韓宗教研究フォーラムに関わつては、明年、次回大会を本所が受け入れ団体となつて金光での開催が予定されていることから、本年は、大会開催に向けた準備に取り組みます。

○ 資料については、引き続き新たな資料の収集、整理に取り組みと共に、資料照会に関わつても、検索システムの内容充実を図りつつ、「資料の公開基準」に基づいた対応の態勢を整えていきます。

平成18年度研究題目

【第一部・第二部】

- ・ 所員 加藤 実 「金光大神の信仰における『場』の意味
— 『此方地内』をめぐる金光大神の信仰把握から考える—」
- ・ 所員 高橋昌之 「神道金光教会時代における『広前』の様相

【第三部】

- ・ 所員 大林浩治 「〈改革〉のロジック—二課題以降の動向—」
- ・ 所員 児山真生 「地域の経済・生活秩序の変容と信仰受容の諸相
— 瀬戸内海沿岸の〈地域信仰の経験〉を神道金光教会時代の
名簿資料を手がかりとして考える—」
- ・ 所員 宮本和寿 「戦後の信心共励活動—体験表明に窺う信心理解の地平とその可能性—」



提

言



「四〇年来のアホ」

嘱託 藤尾節昭



北九州教区は人使いが荒い。私は、いまだもって、北九州教区の布教史編集室の室長を務めさせられている。ただし、何の働きもない、挨拶係である。そして、なによりも、教学研究所の「嘱託」であるらしい。年二回の酒肴料をいただいている。申し訳ない気がするが、室長であるから、研究所の資料を、勝手に、布教史に利用するためである。その他に他意はない。要注意！

もう二〇年以上前、教祖百年祭の翌年、研究所を辞任し、教会で御用させてもらうようになって(？)、初めて、「御用」とは教会の「雑役係」なりと偉大な発見をした。だから、おもしろくないので、酒を飲む口実として、連合会内の友人を巻き込んで、金光四神様の未公開資料や『金光教学』掲載の「金光四神言行資料

集」を読む講読会をやっていた。一〇年以上続いたかも知れないが、それぞれ忙しくなって、さたやみになった。そのなかで、新たな資料の発見もあったが、酒を飲んで忘れてしまった。

しかし、伝承者、言行資料の掲載書籍などについて、細かい解説があればいいと感じた。地方に入らぬと、すぐに、調べべき関連資料が手に入らないので、問題を残しながら、酒に流してしまつたことを覚えている。うまい方法がなかな。今だったら、インターネットで調べることが出来るでしょうが・・・年寄りをこき使うパソコンよ。

教祖一二〇年祭で、『金光大神』が刊行された。奈多教会では、信奉者が年々歳々減少し高齢化しているというのに・・・どうしましょうか？ 読む信心は、心にグサツと来ない。それでも、教団発行の物とならば、読まねばなるまい。この『物』については、変なやつから話しまさせられたし、信者様とご一緒に、何度も読まされたが、読みやすく、つるんとしていて、ひっかかりがない。ありがたさが頭の上を通り過ぎて行く。

そこで、教師四〇年(去年のこと)を期に、心にグサツと来ないので、よせばいいのに、今年から、またぞろ、読むのにすら骨が折れる「金光大神事蹟集」を読んで、一杯やろうよと、福中一の教師部会で呼びかけた。会長が一気に

乗ってきて、希望者に限って、やろうというこ
とになった。

第一回目を先日おこなつた。八教会、八名の方がお集まりになった。この「事蹟集」は、玉石混淆であるから、全てが真実でないという前提に立って、読んでいただきたいと注釈を入れたら、この伝えは、おもしろい、初めてである、あるいは、これは臭い、偏つた見方である等々、おもしろい話がたくさん出てきた。全員、二時間四〇分の輪読会をおもしろく、おかしく盛り上げて終つた。それでは、次回も続行となつた。

問題は、伝承者についての注釈がないことである。教典の人物誌、奉修所の『金光大神』人物誌を参考にしたが、それでも足りない。調べ方法は無いものか。八人とも五〇代以上の男であつた。酒が入つて、むちゃくちゃになつた。クソー、なんたることだ。

このような事蹟集を刊行して下さつていたからこそ、おもしろい会合も開けるのですから、研究所に感謝しなければならぬでしょう。しかし、教祖、教統関係資料を、全部公開してしまつては、その後の研究はどう進めればいいのか、これが難しいところかもしれない。だが、公開されているが故に、研究のしがいがあるので、はなからうか。研究は手品ではないのですから。研究は視座によって決まるのですから。

(福岡・奈多教会)

平成一七年度研究報告

座談会

【テーマ】

「今、教学研究に萌^{まき}しているもの」

【参加者】

宮本和寿、高橋昌之、岩崎繁之、
佐藤道文、島田悠香、秦修一（司会）

〈司会〉本年の研究報告では、個人的な感想ですが、これから研究もずいぶん様変わりしてくるんじゃないかなあと思わせられました。教学研究所の設立五〇周年を経たということもあるでしょう。これまでの成果を踏まえて新しく出発しようという意欲が、広くあつたということじゃないでしょうか。

〈佐藤〉そうですね。私の場合、それを感じたのは兎山報告（「明治後期の宇摩郡天満村における地域秩序と信仰展開」）でした。それは、信仰を受容した側面、地域のニーズから布教展開の実態を見ようということなんですよね。もちろんこれまで布教史研究として試みられてはいるんでしょうけど、どこか布教者中心のイメージがつきまといつてます。それに対して、徹底して地域の側に立つて金光教の受容を見ていこうとする意欲を感じました。

〈司会〉今まで「信仰を伝える人↓信仰によって救われ

る人」という構図の矢印を、反対の「↑」で見てみたらどうかという提起ですね。信仰を受容する側のネットワークだったり、神様を勧請してくるという問題だった。今後、方法をより緻密なものにされるんでしょう。社会の階層移動などを組み入れたらどうなるかなど、広がり期待出来そうです。

〈島田〉大林報告（『覚書』覚帳の神語り世界と金光教のはじまり）もかなり大胆でしたね。「こんなこと言えちゃうんだ」と思いました。「筆記者像を投影させて『覚書』覚帳を読む行為は見直すべきでは？」なんて。「覚書」「覚帳」の背後にある教祖の意識主体、そのありようを窺うという読みは、テキスト読解では保留しますが、同じ保留でも、またそれは別の方法意識が採られてきました。「縁起的視界」の想定がそうですね。それによって、神と人とが結ばれた根源的世界としての「覚書」「覚帳」の神語りを捉え、金光教の歴史へ橋を架けよう、と。

〈岩崎〉「縁起」という方法意識を打ち出したところにユニークさを感じます。だから冒頭でいきなり、『覚書』覚帳は、わからない」と表明できたのだと思います。誰もが言えることではないですよ。「そもそもそれが読めるということを前提としていないか？」「そのような読み方自体には、あらかじめ想定した像を先に立てて、それに合せるという意図が働いていないか？」なんて。これまで「覚書」「覚帳」に用いられてきたテキスト読解も、「いきなりそれを『テキスト』として見ているので、『わからない』『読めない』という問題が何で生じているのかを直接問わないままだ」と指摘されてます。「筆記者である当人（教祖）の像が読めない」という問題は、依然残っているのに無視されてない

か？」この問題に発するもどかしさが、そういう方法に結びついているんだと言えます。

〈高橋〉「覚書」「覚帳」を研究している立場からすると、その指摘は、挑発的なものになっています。というのも、今回出された研究報告の多くは、「覚書」「覚帳」の記述は、教祖自身にとつての主体内容として解釈していただきました。大林報告は、そういう解釈態度への問題提起だと言えます。しかし、単なる問題提起をして終わるといふのではなく、筆記者像が読み取れないことに神という何かに促されて生きねばならなかった人間の言葉の経験があり、「そういう神語りの世界が、古来あつたのだ」という歴史の相へと眼を向けるものになっていきます。

〈司会〉「お知らせ」を教祖の主体内容として直接結びつけていないという点では、竹部報告（「金光大神における超越の視座」）も同じことが言えると思います。神のリアリティーが希薄化しているという現代の問題状況に向き合い、「無限」なるものの実在性がどう可能かを問うものでしたね。

〈宮本〉この報告は、「根源的な無限なるものの実在性を感得するあり方は何か？」を感性の希薄化に晒される現代の課題として示すことになってます。その際、「めぐり」「無礼」など、どちらかというと否定的、負価値なものと考えられてきた言葉を再考させるような着目が見えます。マイナスの価値観も見直すようにして、神から与えられ、届けられる言葉を見る。ただ見るんじゃなくて、その言葉以前の世界から放たれているところ、「無限」といふ世界、その実在へ向かう感受のあり方を見ようとしている。「信心ならではの経験とは、その次元にふれることでもある」という主張になる

んでしょうか。

〈島田〉「現実と無限の世界がどう繋がっていくか?」「信心を実感的に考えなければならぬ論理とは何か?」どれも興味ある問題ですね。ただ無限だけを追究するのではなく、無限とその反対の限定的な人間の状況との両者の接合が、どう今に可能かという観点から読むとおもしろいですね。

〈高橋〉とはいえ、それを研究する者の立場として考えると、よほど研究の手だてを厳密にしないとできないことですよ。『めぐり』『無礼』『めぐり合わせ』に注目することから、教祖の生にある謎めいた要素、個々の生にとつても予期せぬ次元を追究する。人間の目に見えないもの、分ることさえも問わされる神の現われを論じるなんて。報告では、信仰を都合よく解釈・翻訳したりする立場や、信仰の「内心倫理化」を問題にする指摘がありました。無限の世界が言葉だけではあいな分だけに、その問題意識を強くもたなければ、なかなか迫りにくいものだと言えます。「有限性がきまわって、人は無限の世界から照らされる」という神と人間の関係性が示されましたが、それを構造図式としてでなく、「神のリアリティー」の生きた概念として、人間の経験に成り立つプロセスそのものとして描かれることに興味深いものを感じています。

〈宮本〉その他、教祖・教義研究では、大林、竹部報告の取り組みとは逆なんです。細かい筆致とか、金光大神の信仰感覚へ接近していこうとする動向も窺えました。金光大神の「此方地内」にとどまるこだわりの見ようとした加藤報告(「**金光大神の信仰における「場」の意味**」)にも、その傾向が見られましたね。加藤報告では、金光大神の神体験の実感から、「此方地内」への

こだわりの意味を読み解いていこうとしていました。金光大神が生きてきた歴史的な記憶と「多郎左衛門屋敷」などの「お知らせ」を介して示されてくる世界との関係を考え、金光大神の「助かり」の原初の意味を探ろうと。そこには、金光大神の実感に即して明らかにしようという意欲が滲み出ていました。「実感」という関心は、信心の今を問題にする上で共感されるんじゃないかなあ。



〈岩崎〉戦死者慰霊を扱った秦報告(「**霊の助かりについて考える―金光教戦死者慰霊から―**」)なども、現代的なテーマを扱っていると考えていいですね。戦時下から現代まで行われている慰霊が、どのような歴史的経緯や背景をもっているのか、ほとんど知りませんよね。ふつう霊観という社会的な空間の問題で捉えませんか。けれども、報告は霊観、救済の社会的意味を問うことになっていて。それは、国家や社会といった共同体の価値観以前のところから、信仰の根拠を尋ねかけてくるものになると言えます。靖国問題などはホットな議論ですが、本教にとつての慰霊・追悼に関わる議論がまずしっかり見定められていくことが重要だと思います。

〈司会〉今日は、今年度の研究報告を題材に話し合いました。総じて、「信心が今日の自分たちに生き生きと働きかけてくるものとなるには、どういう態度、構えが必要か」という思いが、研究者個々の意識の底流にあると言えます。「信心の意味の形骸化」を肯定する気持ちと否定する気持ちが渦巻いている。率直に言ってそれが研究者の内面でしょう。このことは、信心の良さを共有してきた価値判断が状況から揺さぶられている証拠となっています。しかし同時に、それによって新たに信心の良さを良さとして力を与えるきっかけにもなると言えます。きつければよいきつかけであるに違いないと思います。これまでの常套的な概念や言葉に頼るのでなく、渦巻くような混沌の底から良さをつかみだしてやる必要になっているんじゃないでしょうか。研究は、正直しんどいものですが、しかしそうした役割を負っていることに思いを強くしたいものです。今後、地道な努力を怠らず取り組んでいきたいと思えます。

草創期の群像

大鶴教会 江田道孝



私が研究生・助手として在任していた期間（昭和三四〜三七年）は、顧れば本教教学の基礎確立のための

胎動期、あるいは草創期に当たるといえる。二代所長大淵千俣師の「教学とは、信心の自己吟味であり、信心生活の拡充展開である」という命題を、「追体験」という方法を以て教祖の信心に迫っていくとする先輩達に囲まれながら、私もおぼろにつぶやいていた。

研究生の頃、文献解題が課され、私は学生時代奇しくも出会った在野の哲人富永半次郎氏著『釈迦仏陀本紀』に挑み、釈迦晩年の正覚体験、即ち「永遠の生命に対する執着の解消による人間誕生」の解明を解題しようとしたが、遙かに及ばず、初歩に止まっていた。

二部の助手になり、『概説書』の検討用原稿のガリを切りながら、又もやゲーテ晩年の体験を志向してみたが、その遠大な課題に押しつぶされたまま、心中の座標定まり難く、うだつの上らぬ歳月を悶々として費した。

部内では、本教教義の創出を目指しな

がらも、西田哲学あり、実存哲学あり、更には禅宗あり、あるいは中国の世界ありで、問題意識の領域は広く、他部との交流も日夜に及び、自由にしておおらかな空気に満ちていた。

思い出深いことは、一月に行われる『計画会議』であった。四部門の各主査の企画説明、責任者としての部長の解説。その後展開される各所員の発言は、教史、教団研究への方法論模索の苦悩、教祖追体験肉迫の熱き思い、教祖の信心と現代の人間の難儀性の追究、更には他宗教諸学問と本教との比較研究による教学方法論の探究などに及び、役職を超えて熾烈に論議されていくのであった。

所長は、そこで提起された諸問題の問題性を、洋の東西の神話、諸学説の発想や思考形式などにもふれながら明らかにしつつ、本教信仰の独自性の意義や、研究分野、そして将来に道を開きうる態度と方法を以ての現今としての課題を、示唆しつつ伝えていかれたように思われる。

伝統宗教の神学や宗学の長短に学びつつも依らず、諸学問の業績を吸収しつつも基かず、教祖金光大神を始源とする道の信心の真髄を吟味しながら、拡充展開して止まぬ一貫姿勢の草創期の教学者達の姿を今にして憶う。

(二元助手)

論文を読むひじり

『削島教会 長井みのり』



男性ばかりの前途多難な所でした。というのも朝、部屋に入ると話して

いるのは野球、相撲、車の事等、どれをとってもさっぱりわからず、会話に入っていけないのです。事務で御用されている女の先生が、「髪型かわいいね」と言ってくれると、もう事務室まで行って行ってしまいたくなるのです。

最初は御用していても、注意されることが多く、指導する先生方も大変だったと思います。私は資料化するためのコピー、製本を担当していました。毎日

虫くいの資料を一枚ずつはがしてはコピーしていました。時間のかかる作業でした。そのうち、自分が何のためにコピーをするのかわからなくなってきたのです。一人コピーをとる私の隣の部屋で資料整理をする先生方の笑い声が時折響いてきました。今思うと、一人での作業

は集中できるし、自分のペースでできる恵まれた環境でした。ところが、それよりもさみしいという甘えた思いのほうが強かったのです。

そんな生活の中、ある先生から、研究所から教会に帰られて、紀要を御神前へお供えされている方があり、その姿をみたとき、「自分の力だけではなく、後ろ祈念があるからこそ研究に取り組めるんだと思わされた」という話を聞きました。それを聞いて、私にはそのお手伝いができるということを知りました。と同時にいろんな方々の願いや思いが紀要にあるのだということを知り、自分の御用が無駄ではなく、意味のあるものだとなりました。

この御用の他に在任中、取り組んでいたことがありました。それは論文を読ませて頂いて、研究報告検討会で質問をすることでした。先生方は検討の流れをみながら、重点を置くところを適確に質問されます。それに対して、力不足とわかっていながら質問をしていたのは、時間を惜しまず、努力や苦勞をされている先生方の姿を知っているからでした。こんな私でも自分なりに関わらしてもらいたいと思ったのです。

振り返ってみれば、あの頃の私は助けももらってばかりでした。いつも励まして下さった先生方に感謝しています。今は教会で御用させて頂いています。そして、紙折りをする際には、今でも研究所でのことを懐かしく思い出すのです。

(元資料室員)



万華鏡

この「万華鏡」は、職員が研究・業務の時々で出会った資料や出来事、出張などで感じた論点や、あらためて気づかされたことなどについて語るコーナーです。

覗き方で様々な見え方をする万華鏡のように、今回は、所内三人にそれぞれの視点から語ってもらいました。

資料のつれづれ

所員 高橋昌之



いま私の手もとに、金光四神様が記された帳面がある。表紙には「惣氏子乃おかけお請る心得方乃人名覚帳」とあり、広前に参ってきた人々の氏名、年齢、住所、願い事、その後

の経過などが書き込まれている。日々の御祈念帳の中からさらに抜粋して書かれたものであるうか、明治十九年から二三年までの期間にわたり五百件余りの記述がある。参拝者の住所は岡山が六割を超えるものの、東は東京から西は遠く鹿児島に及ぶ。

細かく几帳面に書き込まれた帳面を眺めていると、四神様と参拝者とのやりとりの一端が見えてくる。記された願い事は、その半数以上が病気や身体丈夫に関する内容で、それこそ頭のとっぺんから足の先まで全身あらゆる部位にわたって、人々が痛みや不具合を訴えている。

彼らの中には、大谷に滞在した数日の間に病気がよくなる人もあったようだが、本人や代参者が繰り返し参拝して全快を祈る場合もあった。帳面には、そうした人々が参拝した日々が順を追って記された後、「病全快致し」と一回り大きく書かれていたりする。また一方では、「おかげ」との知らせを受けたと思われるながら、その翌月に、心なしかかすれた文字で「死去致し」と記されているような場合もある。それら一つ一つの文字からは、人々が必死な思いで広前に足を運び、助かりを求める姿や、四神様が彼らのことを祈念しながら日々を過ごした末に、全快あるいは死去との知らせを聞いたときの思いが滲みでているように感じられてくる。

誰が、いつ、何処から、何を願って参拝してきたのか、そしてその願いは、その後どのような

になったのか。帳面に向き合うことにより、このような事実が少しずつ浮かび上がってくる。それらを、一つ一つ丁寧に整理し積み上げていくことは、研究にとって欠くことの出来ない営みである。しかしその一方で、資料の中には文字にならないものや、数えることの出来ないものも含まれている。それは文字の大きさであったり、筆の勢いであったり、様々なことを書き込む余白の広さであったりする。

一二〇年も前に調べられた帳面だが、それに触れていると、自分自身がその場に立ち会っているような気にさせられることがある。そして一瞬、執筆者の思いに近づいたと喜びつつ、それはその記述の背後に広がる世界への入口に過ぎないことを思い知らされる。この帳面は、四神様が神働された一〇年間の半分の期間で、しかも参拝した人の一部についてのみ記されたもので、全てを解読、分析したとしても、当時の広前の実態のどれほどが明らかになるのか、と自問もする。しかし、広前に人々が集まり、そして彼らの願いを聞き、話をし、祈り、そのことを書き留めた人がいた。そこに生きていた人々の声に耳を傾けることで、彼らの求めている助かりの化身、生きることによっての広前の意味などを考える手掛かりがもたらされ、またさらなる未知の資料に向かう意欲も湧いてくるのである。

(岡山・岡山教会)

復命書、私の出張日記

「—就実大学公開講演会

鷺田清一『へ弱さ』のちから』よ—」

助手 岩崎繁之



教学研究所では、学会への出張や学術雑誌購読などを通じて、現代の諸問題や学問動向の情報収集にアンテナを張り巡らせている。日本宗教学会などの全国規模の学会や、岡山民俗学会のような地域の学会は言うに及ばず、各種シンポジウムや講演会などにも聴講することがある。その時その場所で、様々な問題を抱えている研究者に出会うことは、それ自体研究にとって刺激的なことである。そこで得られる示唆は、様々な気づき（妄想？）を与えてくれる。ここでは、復命書という形を採りながら、ある「気づき」の経験を伝えてみたい。

哲学者鷺田清一氏の講演会が就実大学で行われた。この講演は文学部に在籍する学生に向けた講演を一般公開したものだ。「へ弱さ」のちから」というタイトルであった。鷺田氏は、「へ弱さ」を知ることが生きる（強さ）につながるのではないかと問いかけ、花が咲くその一瞬に重きをおく現代の生け

花や、若者が介護することを通じて得た体験などを事例にした、『生きること』とは何か』について講演された。鷺田氏は、効率性や合理化がもたらす問題や、コミュニケーションの問題など現代の人間が抱える問題を解きほぐしつつ、若者に見られる問題へと焦点化して話をされた。その時のことだった。次の言葉に、ハツと思わされた。

「現代の若者が抱えている問題は、かつては老人がその年齢故に抱いていた問題である」

その問題とは、「こんな私でも生きていいのだろうか」という自己の存在の意味を問うことだと鷺田氏は語る。昔の若者は、生まれながらに職業が決まっております、その範囲で生活せざるを得なかった。それは、行動の制限でありつつ、生活の安定とも捉えられる。しかしながら、近代は選択の自由を獲得したかわりに、不安定を内在化させた。何にでも成れるとは、何にも成れないの裏返しである。だから居場所を求めさまようのだと語る。鷺田氏の講演を聞きながらフツと脳裏をよぎったのが、初めて参拝した山本定次郎に語った教祖の言葉である。

「人間は、どうして生まれ、どうして生きているかということを知らねばなりませんあ」（理Ⅱ山本定次郎2）。

農民であった山本は、この言葉をどう聞いたのだろうか。今まであったもの、これからもあると思っていた、信じていたものが壊される。今いる世界から引きずり降ろされる感覚。それも激しい痛みを伴いながら。しかし、そこには、ある種の爽快感（悲しみも喜びも怒りも痛みも、ない交ぜになつての）

さえ抱かせる、そんな感覚もあったのではないだろうか。まさに大地震を体験させられたのではないかとと思うくらいの震動と共に、鷺田氏の言葉と教祖の「理解」の言葉が共鳴しながら、私に襲いかかってきた。そんな感覚に囚われた。

山本が初参拝したのは、明治九年。教祖が六三歳の時だ。人生でいえば、老境にさしかかっている。からだの衰えも感じ始めていただろう。老いていくことを実感する経験は、自己崩壊の経験ではないかと想像する。「安定」していると疑いもなく信じていたことが崩される経験。山本に語った言葉は、そんな時に教祖の頭によぎった教祖自身の疑問ではなかったのだろうか。

教祖と現代の同世代とは単純に比べられない。現代の老人は肉体的精神的に元気な面が強調される。鷺田氏は、現代は若者が老人の問題を抱く時代だと言うが、私は、老人の方では若者化しているとも思う。若さ＝元気という（強さ）の価値観に支えられて。明るい未来を目指して成長し続けることに価値をみる人間像もいいが、老いを生きるということは、人間にとってこれまで出合わなかった新たな世界を開く可能性を秘めているのではないだろうか。

鷺田氏の言う「へ弱さ」のちから」と、老境にさしかかった教祖の信心、そしてその生き方が頭の中で交錯し、「本当の人間とはどのようなものなのか」という問題意識は膨れあがっていく。それは、ほとんど妄想かもしれないけれども・・・講演の生の空気が、私の肌に直接刺激を与えた。

（大阪・大仁教会）

資料と私

— 古文書解読講座で得た新感触 —

主事 中西教幸



「この掛け軸、何て書いてあるんだろう？」幼少の頃、教会に掛けられた掛け軸を見てそう疑問に思ったものだ。字が読めない。そんな時、どうするか。簡単なことである。知っている、または読める人に聞けばいい。当時ならその該当者は母親あたりになる。「何て書いてあるの？」聞けばいくらでも教えてはくれる。しかしその時はなるほどと思っても、しばらくするとすっかり忘れてしまっていたし、そもそも文字なんだか何なんだかすらわからないような書である。文字として認識出来ない限り、自ら進んで読んでみようという意欲や興味が湧いて来るようなことはなかった。

時を経て、教学研究所資料室へ。その頃になると達筆な掛け軸や書への興味や、読めるという行為への憧れは大いに膨らんでいったが、資料などを「読む」ということには、いまいち興味が向かなかった。しかし、逃れられない運命とでもいうのか、いつまでも「先生、何て書いてあるの？」でいいわけがない。読めたらかっこいい。でも読むのは難儀だ、難解だ。しんどいし、めんどくさい。内容さえある程度わかれば業務の目録書きは出来る。

だから資料を味わう必要はない。そんな性根がちよこんと顔をだす。これでいいわけがないと思いつながらの「これ」である。つまり古文書解読、くずし字解読というのは、いわばそういう己の性根との戦いでもあったわけである。

そんな自分にとって、若干大げさかもしれないが、一大転機とも呼べるイベントと出合うことになる。それが岡山県立記録資料館開催の「古文書解読講座（入門コース）」である。別段、講座の内容が素晴らしかった、というわけではないのだが、専門家から古文書の基礎的な読み方や、時代的な書き表し方などを教授頂くというのは大切なことであるし、また一方で集中的に解読し続ける（ひたすら読み進める）という、一種暴力的でもある時間に巡り会えたことが、何よりも収穫であったろう。これは例えるならば、ジャブの連打を浴び続けるようなもので、慣れてくると、古文書や資料といったものに対する距離感や、場合によっては無性にわき起こってくる嫌悪感などに対して、緩和や耐性を与えてくれたのではないかと思うのだ。

そして、そんな中から感じたことがある。古文書解読とは、資料との対話である、と。つまり、コミュニケーションのための解読ではないかと思う。古文書やくずし字に対する難しいという先入観、そして距離感。そんなものが、いつの間にか和らいでいた。少しでも読めるということが、資料やそれを表した人物との溝を埋めてくれ、その感触が、意欲的にくずし字を調べて読もうという、向かい合う気にさせてくれたのではないだろうか。

それはどこか、昨年の教学研究会で発表したよ

うなことにも関係してくるのであるが、複写・整理という視点からは「資料が語りかけてくる」のであるが、今回は「資料と語り合う」という経験になったのではないかと思う。我々、資料と関わる者は、研究者・資料室員の一線を画すことなく、過去のまは現代の遺産に込められたそのメッセージを読み解く力が不可欠なのである。くずし字を読むという力は、単に書かれていることを理解する力ではなく、そこから現される古人の体温や、時代・風俗までをも浮かび上がらせ、読み取るという解読になっていくことが理想であろう。それは、事務的な書類一つであっても、そこに押されている印鑑の一つであっても、魂宿る語り部だということである。それでいえば、直筆で書かれたような書簡などの一つ一つは、生きた人間が己の持ち得る言葉で創り上げた、魂の依り代とも言える。そんな依り代だからこそ、例えばすでに出版されているものの原稿や下書きであったとしても、不思議と活字とは違い、言葉の一つ一つにインスピレーションを感じてしまうのではないだろうか。

単純な「読む」という作業の中に潜む、無限に広がる資料の世界。その世界の住人たる物言わぬ語り部達と語り合うための媒介こそが「解読」なのであると、この講座を通して、日常業務に対しても新鮮な示唆を得ることが出来たのではないかと思っている。…ただだからといって「読めませうっ！」と大手を振って言えるわけではないことは申し添えておきたい。

(新潟・直江津教会)

○平成一八年度研究生入所式○

本年度は、小野田淳之(岡山・日生)が研究生を委嘱され、五月一日、入所式が本所で行われた。入所式では、所長から実習にあたっての願いと激励(金光教報『天地』平成一八年六月号 MOVEMENT 及び『金光新聞』平成一八年五月二八日号に掲載)の言葉が贈られた。つづいて、研究生の自己紹介と指導所員の発表が行われた。小野田研究生は第一部に指名され、児山所員が指導にあたることになった。

委嘱期間は五月一日から九月三〇日までの五カ月間。期間を通じて、レポートの作成や講座実習に取り組む。

☆研究生の素顔☆



小学生まで、ピアノやオルガンを習い、ドラマ『一〇一回目のプロポーズ』でおなじみ、シヨパンの「わかれの曲」が得意曲だという小野田淳之さん(三四歳)は、見た目は細身、淡々とした口調で話し、物静かな印象を周囲に与える。今は猫をかぶって、児山所員の指導を



(前列左から二番目所長、三番目小野田)

素直に傾聴しているが、その実、目は、研究のカウンターパンチを入れるチャンス、虎視眈々と狙っているとのウワサ。

そんな小野田さんは、「教祖が見ていた世界を自分も見てみたい」と静かに闘志を燃やす。

これからの活躍に期待したい。



▲人事異動▼

(平成17年6月1日〜平成18年5月31日)

一、職員(教団職員)

○所長佐藤光俊、部長竹部弘、6月30日付任期満了。○所員竹部弘、6月30日付任期満了。○教師竹部弘、7月1日付所長に任命。○第2部長加藤実、7月1日付第一部長に兼ねて指名。○教師佐藤道文、同島田悠香、10月1日付助手に任命。○教徒池田道男、12月1日付助手に任命。○助手山崎勢次、2月1日付本部教行布教部へ異動。○助手荒垣寧範、3月7日付復職。○書記太田信治、4月1日付主事に任命。

二、研究生

○研究生佐藤道文、同島田悠香、9月30日付委嘱期間満了。○教徒池田道男、9月1日付委嘱、11月30日付委嘱期間満了。○教徒小野田淳之、5月1日付委嘱。

三、嘱託

○教師佐藤光俊、7月1日付委嘱。○嘱託福嶋信吉、12月10日付河井と改姓。

四、研究員

○研究員水野照雄、11月30日付委嘱期間満了、翌日再任。

五、評議員

○評議員岡勝繁、4月19日付辞任。○教師岩本世輝雄、5月10日付任命。

◆おめでた◆

結婚

○助手岩崎繁之は12月18日、城間沙弥香さん(大阪・上新庄)と結婚。



SAKAMICHI

◇今年も『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。原稿を執筆して下さった方々には御礼を申し上げます。

◇表紙の写真は、掲載に適切なものが無くて困っていたところ、所長が以前に撮影されたものを提供して下さい、掲載しました。今は手前の木々が成長した為、このアングルで写す事はできません。大変貴重な写真です。

◇職員から草創期に入所された先生方の生の声が聞きたいとの要望があり、「思い出」コーナーで江田先生にご寄稿をお願いしました。いただいた原稿からは、文章の格調高さに研究所草創期の雰囲気も伝ってくるようです。藤尾先生・長井先生の原稿からも、研究所での御用が思い出に留まらず、現在に生きて働いていることを感じさせられました。現在の職員も、御用を通してお育て頂くことの願いを新たにしております。

◇昨年まで『聖ヶ丘』の編集にも使用していたコンピュータが故障し、更新となりました。結果として、写真入り原稿を打ち出す時間が早くなり、ありがたい事です。また、昨年コピー機が更新されたことにより、コピー(印刷)による紙面の画質も向上し読みやすくなったと思います。印刷業者のように出来ませんが、技術面だけでなく、少しでも読みやすく中身の濃い、皆様に親しまれる『聖ヶ丘』の発行を目指していきます。どうぞ今後ともよろしく願います。

発行・印刷 金光教教学研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一之三
電話 (〇八六五) 四二一三一一七
FAX (〇八六五) 四二一三一一九